

幼児のうたう活動における「音楽的な場」の成り立ち

梅 澤 由紀子 (幼児教育教室)

Contraction of the “Musical field” of Children’s Singing in Kindergarden Class

Yukiko UMEZAWA

(Department of Early Childhood Education)

要約

保育場面での幼児のうたう活動の様々な実践例を、「音楽的な場」の成立という視点で分析考察を行なった。

保育の中で歌う活動は、1 うたうこと単独 2 遊びやリズム運動、踊り等と一体になっているうたう活動の2タイプがある。それぞれの「場」の成り立ちが異なる。1のタイプにおいては、うたうことの持続が鮮明に粹付けられるが、そこで「場」をつくりだすベースには、保育者と子どもの自然な交流によってもたらされる「うたい合う関係」がつけられていることが前提である。

2の遊び表現に伴うかたちのうたは、身体表現やリズム的運動等 遊びや表現する内容・タームの獲得によってうたが統合されたかたちで、あるいは遊びの推進するかたちで展開される。したがって、うたう状態への粹もゆるく、聴きつつうたう自己に統合して持続させる必然は強くない。また、「場」の強まる瞬間はきわだっている。

両者のタイプともに、音楽的な場の強まりは、その瞬間に幼児にとって表現する音表象やリズム運動がしっかり定まっている時に認められる。音楽する自己の状態に自身統合するよう意識をむけ、その状態を持続するプロセスを実現していくことが、幼児期のうたう表現の課題である。

キーワード:

「音楽的な場」 うたい合う関係 表現 音表象

はじめに

幼児の表現において、うたうことは重要なウエイトをもっている。保育の中でも、うたうことが様々な形でとりいれられているが、「最近、幼稚園から音楽やうたうことが消えていった」という声もきこえてきている。保育全体のありようが変わることで、うたう

活動においても、ある変化が進行していることが推測されるのである。

うたう活動、うたを中心とした活動が保育場面でのようなものなのか。主として、遊び場面でのどのような音楽様式のカテゴリーに属する広義の「うた」活動(「中間形式」をふくむ)がどのように展開されたかを、保育者と一緒の場面と比較してその音楽的特徴を論じた一連の研究がある。¹⁾ また筆者らは、家庭における遊び場面での幼児の自発的なうたの様態に注目してきた。²⁾

何より「うたう表現」であるという事実を明確にすること——歌に向かう動機から、ひとりびとりのうたが始まるという見方から出発する必要がある。そのため、幼児の表現としてのうたう活動の様態そのものに着眼すること、保育者と子どもでつくるクラスというまとまりの中で、この時期の(4-6才)うたう活動の成立を知ること、そしてそこから保育の中の課題が明らかにされると考える。

幼児の音楽的表現を捉える視点として、筆者らは、以前「音楽的な場」という概念を提起した。家庭での一幼児のうたう状況の長期的な観察から導いた「表現」を分析する方法である。何らかの音楽的事象の成立している様態を、音楽的な場の持続(時間的)と強さの2軸において捉えることができると提起した。³⁾

自発的なうたの表現は本来即興的である。その瞬間のうたおうとする欲求と、つけられた“うた”らしいフレーズの確かさ(安定)によって「音楽的な場」となる。はじめから、はっきりと短く閉じられた「うたいきり」型の「場」もあるが、自発的なうたにおいて、「場」はつけだしている条件が許すかぎり持続する性格のものであり、また、満足のいく表現的——音楽的事象をつくりだせていると、磁場のように勢いが強まる。そのような、自動運動的な様相が確認できる。

本稿では、保育者が関わりをもち、子どもたちが一定参加することを前提としている場面で、持続がどのような要因によって支えられているのか、どのような条件で「音楽的な場」が強まっているのかを中心に、

実践事例に基づき分析考察することを目的にする。

ところで、このような観点にたつことは次のような点で有効性があると考えている。

1) 幼児のうたう表現を、「設定された一斉保育場面」でのものか、「好きな遊びの場面」におけるものかという分類で分けてみない。「設定された場面」においても「場」が成立している場合もありそうでないこともある。表現の様態は個々、様々である。

2) うたうことを、表現として質的な行為としてみる。かりに音声として発せられていない場合でも、能動的な表現であるし、その逆もあると捉えている。

3) 幼児の音楽の楽しみ方・構成の仕方を、時間的断面で変化するものとして動的にとらえる。

4) うたうことは単なる音響現象としてではなく、保育の中で成立するできごととして、子どもと教師との相互的関係（保育全体の方向および、音楽する関係）において成立することであると考える。

いずれも、幼児のうたう表現への向かい方を、その多面性のままに考察しようと意図するものである。

資料としたものは、保育者とともに何らかの音楽的——うたう活動が展開している場面のものである。保育のスタイルの異なる5園 年中10クラス 年長10クラスの歌う活動を中心とした時間の様子の観察とビデオ記録、およびクラスの先生に協力依頼して得たテープ記録である。

「音楽的な場」の強まる時

観察された実践事例から、幼児のうたう表現の多様なありさまがみえてくる。実際、うたを最後までうたうことが前提とされ、表現の始まり終わりの枠があり、表現のスタイルがある時空間と、参加の仕方がそれほど決まっていない自由度の高い場面とがあり、その条件により子どもたちのうたう行為自体のフレームが異なっている。この点で、観察収集されたクラスごと、また時間によっても楽しみ方にちがいがあった。そしてそのことを視野にいれたうえで、個々の「音楽的な場」の中に変化が発見された。

音楽する要件として、まず、うたうことに意識をむけて自身の身体を統合している状態にあることが強調されねばならない。⁴⁾ そしてまた、幼児において発達の点でも、まず自ら音楽する構えがつくり出されること、そして、その状態がより長く持続できることが⁵⁾ 重要なことがらといえる。

すなわち、1) 瞬間瞬間、音楽する自己に統合されること、2) その状態を持続することである。成人でも条件によっては必ずしも容易ではないが、音楽的経験によって学習されたことがらから先にあげた1) 2)

に要するエネルギーを軽減している。が、幼児にとって例えば16小節以上のうたをはじめてから通して一人であらうことは、一定の音表象にむかう集中を要することである。そのような幼児の特徴からも、「音楽的な場」の強まりが重要なことである。音楽的な場が強まることで、音楽することに意識をむけるよう自己を統合することができ、さらに持続できるからである。そしてそれは、表現する内容のイメージと音表象が明確に定まる時であるといえる。以下、実践事例からその典型的なものをみて考察していく。

事例1 新しいうたに会った時

4歳児クラス

子どもたちが「ビンゴ」「ミックスジュース」と保育者の伴奏で続けてうたった後、「おもしろいうただよ」と「おはよう九官鳥のうた」を保育者が初めてうたう。保育者が一度通してうたった後、「うたえるかな」と誘うと、「うたえる」と口々に応える。第二フレーズの「おはよう」で数人が入ろうとうたう。特に最後の「おはよう」の部分ではタイミング、音程とも正確に女兒がすっきりうたう。(楽譜1)

比較的人数の少ない4歳児のうたは、はりきってどなり声になっていた子どもがいた。年中児にありがちであるが、その声が子どもたちの大半を制してしまいがちな時がある。「うたえる」「知っている」という発言にうたう喜びの実感が見える一方で、子どもたちの声の重なりがきつく、時に乱暴にきこえる。その後、先生の無伴奏のシンプルなうたにはじめて耳を澄ましたときである。

うたえることに満足感をもって、他のうたでも飛び出すようにうたっていた。新しいうたを吸収しようと、いち早くこの単純な繰り返しのフレーズ（「おはよう」）をつかむ。誘いかけるような間をとった瞬間に、保育者のうたに答えている。音表象をはじめつかもうとし、待ってうたった。「九官鳥のうた」は翌日も、のびやかにうたっているが、この時のような場の強まりは感じられない。保育者の声を聴いて、その瞬間にはじめてとびだすように歌ったときの感じと、音を創り出す集中が幾分異なるのだろう。

あさおきてオハヨ ねるときオハヨ
あうめらんのオハヨ ごあいまうオハヨ

楽譜1

同じうたを別のクラス（5才児）では、「今度は何」と主人公を変えているようなヴァリエーションを楽しんでいた。即興の遊戯的気分が、音楽的な場を強くしていた。

持続に向けて

事例2「ポケモン」をうたう

5才児

いくつかのうたを観察者に聴かせてくれるといった様子でしっかりうたった後、次は何をうたおうかと保育者がたづねる。「ポケモン」（「めざせ ポケモンマスター」 戸田昭吾作詞 たなかひろかず作曲）のリクエストが何人かの子どもからあがり、保育者が「先生はこれ伴奏弾けないけど、いいみんな」と駄目押しをする。が、良いという返事から前奏をひき始める。（楽譜2）

特徴的なはやい音型でアウフタクトのスタートをしっかりうたおうとする。が、不揃いのテンポ、メロディの輪郭もあいまいである。保護者の初見の伴奏はうたをリードするというより、旋律を思い起す手がかりの働きにとどまる。子どもたちは声をはりあげるふうではなく歌のイメージを一人ひとり確かめるようにうたう。合いの手のフィルインや、おもしろいことばにはうたいながら少しを嬉しそうにする。ある時は自信なげで声の調子は弱い、特徴的なフレーズをしっかりつかまえていて、それを連結するかたちで最後までうたう。

実際、音とくに拍が決まっていない。しかし、うたがもかく持続した事例である。子どもたちはうたいきり満足しているふうである。

初めての不完全な伴奏でのうたは、幾度も繰り返したうたっていたらフル装備の伴奏と勝手にちがいが、持続させるにはエネルギーが要った。保育者の通常のうたのピアノ伴奏は、しっかり拍をきざみ拍を意識せずにうたえる支えとなっていたことがわかる。またこのうたの前半部分で拍を感じてうたうことは、幼児には（大人にも）かなりむずかしいといえる。声を揃えてうたい「音楽的な場」が持続するうえで、拍感の定まることが大きな役割をはたしていることがこの事例

からよくわかる。

それまでの歌の歌い方と鮮やかにちがっていたのは声の質、音量とともに歌うときの表情であった。表現への真剣さ、音を探りながらの状態と、このうたの内容への共感（テレビアニメ、ゲームのテーマ音楽うたのドラマに）が、うたのむずかしさ——16分音符を3度音程で早口ことば的に続ける冒頭器乐的メロディ、一オクターヴの跳躍や高音での持続等——にもかかわらず、場を強く成立させていた。またこどもたちの没入的な様子にこのうた表現の様態が表れている。インナーヒアリングをしているようだ。「ポケモン」のうたのかっこ良い（歌詞音楽とも、まさに背伸びしてうたいたい）フレーズ連続できてうたのイメージが心の中にしっかり位置づいていた。

このうたでは、幼児に多い「元気な」強い声でなかった。強い力が入った声は、音楽的な場の強さを表していることもあるが、声の質を歌う状態にむかっての発声かどうか（「どなり声」か⁵⁾）ということに照らしてみると、判断の基準になると思われる。特に、大きな音響や多人数での中での強い発声の多くは外にむけての顕示で、うたうことに自身が充分、統合できていないことからの不安の結果である。子どもの歌う表現を聴くとき、子どもの意識のむけ方と関連し、このことはクリティカルなことではないだろうか。また、どなりがちな子どももよく聴くと、どなりっぱなしですべてうたっているわけではない。

これらの事例に共通することは、

- 1) うたの音表象をつかもうとし、自分での音つくりにある緊張感を感じてむかっている状態であるということ。うたうことの動機があり、特に憧れがあり、したがって聴こうとしている。
- 2) 保育者と子どもが、素朴に同じ地平で協動的に音楽している状態であること。

何曲もうたう中でのことばのやりとり、うたうことに対して興味をもっている様子がかがえることから、子どもと保育者のあいだに安定して「うたい合う関係」がベースにあったことが指摘できる。うたう時間の共有、一緒にうたい合う関係を日常的にもてることが、保育の課題である。

楽譜 2

魅力的な表現内容に焦点をあてる

表現するイメージの定まりは、先にあげた例のように、うた全体の場合と、インパクトのあるリズムフレーズや中心的なシンボル動作（ふり等の表現）、運動（足を踏みならず等）を核として成り立つことが多い。それらの核にむけて表現することが、結果的に場を強めていることが、いくつかの事例からわかる。

事例3-1) 強いリズム帰結と他のシンボルの支え
「バスごっこ」 5才児クラス

昼食後はクラスから出ないで昼食中の子どもを待ち保育者のピアノに合わせて、思いおもいにうたったり、興味をひくことをしたりする自由な時間である。子どもたちがよく知っているうたや、器楽で練習中の曲が続けてピアノで奏される。子どもによってかなり続けてうたっている子と、そうでない子どもたちが、いろいろな物音がしている。「キノコ」のうたの後半から子どもたちの声が定まってくる。

「バスごっこ」(香山美子作詞 湯山昭作曲)のうたで、何人かの子どもが参加するそれまでの淡々とし歌い方や参加のしかたと異なり、うたいだしから拍感をもった左右上下動のふりをし、魅力的瞬間を決める強い運動リズム動作がみられる。「おとなりへ」のうたいながらの手拍子と「ハイ」での帰結を決め、最後の「ポケットに」の前のフィルインの2拍の手拍子からしぐさへと表現の起伏を楽しむ。2番で歌詞内容のしぐさのあと、3番ますます強まる。椅子にすわっての動きから男女児数人突然たちあがり、「どん」で全身の重みをかけて力いっぱい飛びあがって足音をたてている。(楽譜3)

楽譜 3

よく歌われるうただが、このクラスでは非常にダイナミックに身体運動を味わっている。輪郭をもったタイミングを決める運動としぐさによる身体的表現がうたうことと一体になっている。表現の中心が非常にしっかり定まり、一人一人でもたまた友達と見合って「ここぞ」という感じで楽しんでいる。

3-2) 打つ動作をしながらうたう 5才児

同じクラスの場面で、「手のひらを太陽に」(やなせたかし作詞 いずみたく作曲)のメロディーがピアノで弾かれると、おもいおもいのことをしていた子どもたちが、にわかに前奏からへ長調の固定ド的にうたう。「ドシトラソファ」の帰結が大事なのである。(前奏の最後の拍をたたく動作で決める)それからうたいつつ、

それぞれちがうスタイルで打楽器を演奏する動作をしている。宙で楽器をたたくようにしたり、両手で部分的にリズムパッセージを太鼓をうつように机たたきをしている。うたいながらたたいたり、その前後をうたい強い場になっている。(楽譜4)

ピアノの前奏のリズムから、音楽する楽しみを方向づけていた。そして、子どもたちに、少しむずかしいリズムに挑戦しているスリルが感じられる。

楽譜 4

これらの状況を重ねてみると「ここ」という瞬間への強いリズム欲求がうたの場を強めていることが見て取れる。身体動作を伴わないうたが通してうたわれる時も、子どもたちは把握しやすい部分に直接的なリズムの心地よさを感じ場が強まること、どのテープの声にも表れている。その部分のうた声は定まり、どれも生き生きと明るい。

例えば「オブラディ オブラダ」や「となりのトトロ」の特徴的なシンコペーションをふくむスキヤット部分、「ミックスジュース」の8分音符の連続の前半から転じて後半に入る瞬間の「それは、ミックスジュース ミックスジュース」とタイミングを決める箇所、「シンデレラのスープ」の「チャ チャ チャチャ」「シンデレラのかぼちゃ」の部分等。(楽譜5)

楽譜 5-1



歌を伴う遊び表現

事例 3-3) 「アルプス一万尺」

5才児クラス

降園前のひととき、ピアノにあわせ歌いお手合せをそれぞれ楽しんでいる。ピアノはゆっくりとテンポをとっているが、むずかしいパタンではなかなかお手合せはあわない。が、幾つかのグループは挑戦しつづけて合わないことに不満はない。また、お手合せなのに二人というばかりではない。アップテンポになるとテンポ変化に対応して、速くしようと興奮気味である。

その後、同じ曲でテープにかわり、それぞれの2人から多くは10人位のグループになりうたい音楽に合わせ踊る。歌っている時もあるが、主に仲間と軽快に踊ること、そしてジャンケン遊びに興じている。うたの前半のフレーズの終わりですばやく、ジャンケンが入り、この瞬間にむけての集中が強い。何回も繰り返されるが飽きることはない。テープが終わった後もつづけて遊んでいるグループもある。

この曲は幾度も遊びこまれたものである。10人位の女兒グループはジャンケンより踊りを構成することポーズをきめることに意識をむけ相談したりしている。参加のしかたが多様で、それぞれの仲間関係のペースで楽しんでいる。極端なペアは「一万尺」の音楽と別に、自分たちで「お寺のおしょうさん」のジャンケン遊びをしつづけていた。

全体に、子どもたちの遊ぶエネルギーが強く勢いをもっている。うたは遊びの推進役で通してうたっているわけではない。⁷⁾ 別の時であるが、仲間と踊るためのうたに対し（「輪になって踊ろう」）遊び踊る仲間がたまたまみつからなかった男児が2名大きい声をはりあげてうただけをうたい、不安定な気持ちを表していた。

以上の3事例に共通しているのは、この瞬間に遊ぶ内容やリズムの動作が強いインパクトをもっており、遊び表現の結果がはっきり身体的にかえってくることである。

水野は、幼児の活動を観察していると、歌を歌だけでうたうということは極めて稀であり、ゲームや絵をかくこと踊りに伴って歌われることが自然であるとしている。確かに、歌いつつ身体運動を行なうことは、子どもたちの間にストレートに伝播しやすい。幼稚園

などの仲間関係における行動観察に限ってみると、水野の指摘のとおりであろう。

また、うたをはじめから通して最後までうたうより2小節ほどの断片を気持ちよくうたうのが普通であると述べている。そのうえで、次のようなタイプのうたう—音楽活動を提起している。⁸⁾

1) わらべうたが発展した集団あそび型 2) 歌の調子のよい部分で全身の音楽的エネルギーを発散させるような「ディスコ」型 3) 劇的な活動を伴った音楽劇型〔ただし1)に2)も含まれ区別は明確にひけないとしている。〕

この事例は、1)のわらべうたが発展した集団あそび型で2)のディスコ型の要素も含まれている。

遊び—総合的な表現であるが、遊ぶおもしろさの中に全身的な発散やリズム帰結の魅力とともに、事例の3-2) 3)とも、それまでに獲得したリズム運動の技能面のチャレンジがあったことに注目したい。何回も繰り返し経験したり、練習したことのうえでの発見や試みである。年長児は、うたやリズム的活動に達成感をもつことが必要で、かなりの複雑さ、むずかしさを求めることを、ビデオの子どもたちの様子が示している。

考察

以上あげてきた典型的な事例は、様態のちがいにより次のことが指摘できる。

うたう活動への意識の状態

1) うたうことの参加の自由。基本的に全員参加が前提の場合と自由参加の状況がある。ここでは何をするかという行為の枠づけが子どもの規範意識となっているが、そのちがいは相対的なものである。

2) うたうことが独立的で、通してうたうことが求められる状態と、遊びを推進するものとしてうたが機能している場合があり、前者は自分がうたうということが動機づけられると、うたう状態を保とうと努める。後者では遊ぶことに意識がむきあそびの欲求に伴ってうたうので、うたう状態が持続される必要はなく、断片的でよいことが多い。

保育者と子どもの関係

3) うたい合う関係について。クラスの子ともと保育者のあいだで、うたい合う関係が成立しているかということが根底にある。どのように音響や音声が決まるかということ以前に、ゆったりと安定してうたうことに向かう時空間をつくることのできる関係・きくことに集中できる条件が、とりわけ今日の保育の課題である。うたい合う関係—雰囲気のもとに音楽的な場が成立する。また伴奏のもつ意味は大きい。

4 うたうことは、純粋に自己報酬的であるが、幼児はうたを理解し知っていること、うたえることをパフォーマンスする自分への満足が大きい。保育者の関わりがそのことを助長するように行なわれる。

うた単独型の場合子どもたちのうたう達成にむけバックアップするよう働きかける。例えば、歌詞が歌う瞬間にうまく入るようにタイミングよくリードするなど。

遊び的表現では、保育者は遊ぶ音楽的環境を提供し、自ら表現のモデルを示すが、表現自体への自覚——対象化にむけて支えたり、うた表現を意識するようなフィードバックを特に行なわない。

表現の照準と技能

5 練習の影響——事例のいくつかで、保育の活動の中でかなり学習して獲得した技能を歌いながらリズム運動的に表現を楽しんでいることから、その内容が子どもにとって魅力的なものであることがわかる。リズム運動のインパクトが幼児に大きいことが確認されるとともに、練習——学習の結果得た技能に支えられたことが、年長児に熱中する遊びになっており一斉的活動の内容と循環がみられる。

6 子どもにとってうたうに足る魅力のあるうたや、表現するに足る内容に出会い、そのフレーズが位置づけられる時、音楽的な場は強まり持続する。音表象がしっかり定まって音楽する自己を保つことができる。またその時、不自然な発声はない。

7 場が強まっている状態の幼児の表現は、いずれもかなり没入的である。

場の成立を支えること

8 発達的に見て、次第に他のシンボルの助け（ふりしぐさ等）がなくても、自立的に音に集中する状態を持続できていくことが課題であろう。幼児期は“うたう状態——構え”そのものをつくっていく過程にあると考えられる。

結び

実践事例の資料は、うたに限らずそこで展開している関係的なできごとすべてが異なる。子どもたちのうたう活動の様相だけがひとつひとつ異なるのではないだろう。

音楽的な場の成立に着眼して考察してきたが、クラスの子どもの生活に「うたい合う関係」が徐々につくられてゆき、そこに「場」が成立するのであった。うたう活動も保育者と子どもたちでつくる一つの小さい文化である。

研究的立場から、幼児期のうたう活動を自然現象をみるように客体化（固定化）しがちであるが、表現として、それぞれの場の成立の様態をみることに目を転

じたい。

保育者どうしでうたい合う関係をつくると、自ずと子どもとのうたう関係が質的に変容する。今村は、保育者がうたう表現を自身の課題とし子どもたちに聴いてもらおうととりくんだ結果、子どもたちは表現することに出会うと述べている。⁹⁾そして、表現することが子どもに対象化されていくプロセスを指摘している。

「子どもは大人との交流の中で、ものや文化や社会に出会い育っていく。その時何に出会わせどのように体験させるか、それは大人の行為そのものにかかっている。出合いをさせることができるには、自分が確かに出会った経験が必要である。」

子どもたちと構成する音楽的な場は、保育者自身の音楽的な場でもある。教師や保育者が、自身の音楽的な場を無理なく自然につくることが、たとえ聴いているだけで、うたっていないくとも、子どもたちの歌う活動を成り立たせる条件ではないかと考える。

参考引用文献

- 1) 藤田美美子 幼稚園における“様式化された話し言葉”第41回 日本保育学会論集 1988 pp.612-613
保育の場に見られる音楽的表現活動 第45回 日本保育学会論集 1992 pp.90-91
- 2) 梅澤由紀子 南曜子 幼児のつくりうたが生まれる時 保育研究 9-4 1989 建帛社 pp.59-69
同上 一人遊びの中の自発的なうたについて 第38回 日本保育学会論集 1986
- 3) 南曜子 梅澤由紀子 幼児のつくりだす「音楽的な場」——表現を分析する方法について 第17回 日本音楽教育学会発表資料 1986
- 4) 木村敏 あいだ 弘文館 1988 pp.20-29
- 5) 細田淳子 子どもの歌唱について——となり声に対する一考察 音楽教育学 23-1 1993 pp.14-23
- 6) 南曜子 歌唱行動の始まり——乳児の歌唱行動の発達に関する理論化の試み 音楽教育学 27-1 1997 pp.77-83
- 7) 後藤田純生 子どもの“音楽を伴う遊び”の学習習構造について 音楽教育学 27-1 1997 pp.84-90
- 8) 水野修考 子どものうた 児童文化の研究 齊藤良助 角尾和子 編著 1987 pp.109-135
- 9) 今村方子 うたを通して子どもを育てる視点の確立 現代と保育 32号 1993-10 pp.164-175
歌を通して仲間を創る保育 同上 33号 1994 -10 pp.122-133